今治明徳高等学校矢田分校

平成二十四年度

国　語

注　意

1　問題は、1ページから7ページまであり、これとは別に解答用紙が1枚ある。

2　解答は、すべて別紙解答用紙の該当欄に書き入れること。

(一)　次の文章を読んで、1～8の問いに答えなさい。

筆者はアメリカ、及びスイスにおいて心理療法家になるための訓練を受け、その後、日本において仕事を続けてきたので、欧米人と日本人の心の在り方の差について考えさせられることが多かった。[1]それらについては、これまでにいろいろと発表してきたが、その中で、特に問題と感じたことは、[注1]自我の在り方が日本人と欧米人では異なっている、ということであった。欧米人が、「個」として確立された自我を持つのに対して、日本人の自我――それは西洋流に言えば「自我」と呼べないだろう――は、常に自他との相互関連の中に存在し、「個」として確立されたものではない、ということであった。

[2]西洋人から、この点に関して日本人の無責任性とか、他人志向性などと言って非難されることもある。ある西洋のビジネスマンは筆者に対して、日本人と交渉するときは、誰が本当の責任を持っているのか解らないので困ると言ったことがある。ある人と交渉すると、「上司と相談して」と言う。そこで、その上司と直接交渉すると、「部下と相談して」と言う。一体どうなっているのか、と言うのである。あるいは、日本の学者と話していると、いろいろなことはよく知っているのだが、自分自身の意見を言わないので面白くない、と言った人もいる。あなたの意見はと言わ[b]れると、まず周囲のことを気にする日本人の傾向は、欧米人に言わせると「自我がない」とまで極論したくなる程なのである。

A　、以上に述べた日本人の自我の在り方が、必ずしも悪いことではないことは、最近とみに発表される、日本人研究が明らかにしているところである。日本人のこのような自我の在り方は、日本の経済成長の原動力の一つに挙げてもいいだろう。企業内の人間関係において、日本人の自我は常に他に対して開かれた、他との相互関連において働いているので、それは、欧米のように契約によって関係づけ[c]られたものよりは、遥かにスムーズに、能率的に働くところがある。勿論、このために多くの日本人が「我を殺す」辛さを味わわねばならないのだが、ともかく、全体としては機能的に働くので、日本の企業の発展の支えの一つとなる訳である。勿論、このことは一長一短があり、俄かに利害得失や善悪の判断を下せぬものであるが、日本人の自我が欧米人のそれと比較して異なっていることは事実であると思わ[d]れる。

このような日本人の自我の特性を、象徴的に表現するものとして、筆者は日本の昔話が西洋の昔話と異なる点に注目し、西洋人の自我は「(　Ⅰ　)像」によって表すのが適切であるのに対して、日本人の自我は「(　Ⅱ　)像」によって表すのが適切であるという仮説を提唱してみた(『昔話と日本人の心』岩波書店)。これは大胆な主張である上に、象徴的な表現を用いて述べているので、一般には理解されないのではないかと危惧したが、わが国においては、思いの外に広く受け入れ[e]られ、嬉しく思ったのである。

ここで、筆者の考えを簡単に繰り返すと、次のようになる。西洋の昔話に於いては、男性の主人公が怪物を退治して、それに捕らわれていた乙女と結婚する、ということを基本的なパターンとする話が多い。それに比べて、[3]わが国の昔話は、そのようなパターンに従うものが皆無と言っていい程なのである。その西洋の物語は、[注3]ユング派の分析家ノイマンが解釈してみせたように、西洋近代における自我の確立の過程を象徴的に示している。怪物退治は、自我が無意識と切断されたものとして、個を確立すること、あるいは、母なるものとの絆を断って、自立的になることを意味している。その次に生じる乙女との結婚は、一度切り離された自我が世界と親密な関係を回復することを意味している。

これに対して、わが国において、そのような昔話が見当たらないことは、日本人の自我の在り方が西洋人のそれと異なることを反映していると思われる。そして、筆者とし

ては、すでに示したような男性の英雄像で示されるような自我に対して、日本人の自我は、それを無意識と切り離したり、自と他の区別を明確にしたりすることなく、曖昧（あいまい）な全体的関連の中に存在しており、それは、「女性の意識」と呼ぶのが妥当なようなものであると考えたのである。そして、そのような「女性の意識」の発展の過程を、わが国の昔話の中に跡づけたのである。その点はここでは省略する。［B］、筆者の言いたかったことは、日本人の自我が西洋のそれに対して、「発達の遅れた」ものではなく、別個の種類のものであり、互いに一長一短で、善悪の判断は容易に下し得ないとするものであった。

筆者の考えは、国内において相当受け入れられたが、それが果たして欧米において通じるものなのか、その点が心配であった。そこで、筆者が一九八二年に文部省の在外研究でスイスに行った時、自分の考えを私的にも公的にも、いろいろな機会に発表してみて、その反応を見ようとした。今の若い人達と異なって、筆者の年代の者は、欧米崇拝の気持が強く、事実、自分は欧米人を師として多くのことを学んで来たので、彼らと異なる自分の考えを述べることには、少し勇気を要したが、とにかくやってみたのである。

その結果、当初の予想を遥かに越えて、筆者の考えが欧米人に理解されることが明らかとなった。理解されると言うよりは、筆者の話から何事かを学びとろうとする態度さえ感じられたことは、真に驚きであった。［C］、筆者が接した人々は、欧米の文化に対する反省が強く、何かと新しい道を切り拓（ひら）こうとして努力しており、必然的に東洋に対して関心を持っている人達が多かったので、このようになったのであろうと思うが、こんなことは、かつて筆者が一九六〇年頃に、アメリカやスイスにおいて学んだときには全く考えられないことであった。

（河合隼雄『日本人とアイデンティティ』による。）

（注1）自我＝自己。自分自身についての意識。
（注2）危惧＝危ぶみおそれること。不安。
（注3）ユング＝スイスの精神科医・心理学者。深層心理について研究し、分析心理学の理論をうちたてた。

1 ［A］～［C］に入る最も適当な言葉を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を書け。

ア ともかく　イ むしろ　ウ しかし　エ たとえば　オ もっとも

2 ――線「一長一短」のように同じ漢数字「一」が入る四字熟語として最も適当な言葉を、次のア～オの中から一つ選び、その記号を書け。

ア □衣□水　イ □喜□憂　ウ □変□化
エ □念□起　オ □載□遇

3 ――線a～eのうち文法的に違う用法のものを一つ選び、その記号を書け。

4 （Ⅰ）・（Ⅱ）に当てはまる最も適当な言葉を、文中からそれぞれ**二字**でそのまま抜き出して書け。

5 ――線①「それら」が示すものを、文中から**十五字**でそのまま抜き出して書け。

6 ――線②「西洋人から、この点に関して日本人の無責任性とか、他人志向性などと言って非難されることもある」とあるが、西洋人から、どの点に関して日本人は非難されているのか。文中から**二字**でそのまま抜き出して書け。

7 ――線③「わが国の昔話は、そのようなパターンに従うものが皆無と言っていい程なのである。」とあるが、その理由を筆者はどのように考えているか。文中より**五十五字**以上**六十字**以内でそのまま抜き出し、「～いるから。」に続く形で最初と最後の**五字**をそれぞれ書け。

8 問題文の内容と**合致しないもの**を、次のア～オの中から一つ選び、その記号を書け。

ア 日本人の自我は、常に自他との相互関連の中に存在し、「個」として確立されたものではない。
イ 日本人の自我は、欧米人の自我よりも発達の遅れたものである。
ウ 一九八二年、筆者の考えは、欧米においても予想をはるかに越えて理解され、学びとろうとする態度も感じられた。
エ 欧米人は「個」として確立された自我を持つ。
オ 日本人の自我の在り方は、全体としては機能的に働くので、企業の発展の支えの一つとはなる。

（二）次の1～4の各文の――線の部分の読み方を、平仮名で書きなさい。

1 寡黙な人物。　2 ビタミンを摂取する。
3 甚だしい被害が出た。　4 木が朽ちる。

（三）次の1～4の各文の――線の部分を漢字で書きなさい。ただし、必要なものには送り仮名を付けること。

1 キョクチ的な大雨。　2 お金がなくケンヤクする。
3 人々の期待にムクイル。　4 パーティーをモヨオス。

（四）次の文章は、サッカー部のサブ・キーパー（注1）である高校二年生の「俺（木島）」が、初めて練習試合に出場した場面である。これを読んで、1～7の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上省略した箇所がある。

いつものグランドだ。毎日毎日イヤってほど見てる学校のグランドだ。いつものゴールだ。毎日毎日練習で入っているゴールだ。いつものチームメイトだ。毎日毎日うんざりするくらい一緒にいる仲間だ。ぜんぜん、そんなふうに思えなかった。どんなにクールになろうとしても無理だった。たかが、練習試合。ケチな大会の予選ですらない。

落ちつけなかった。

落ちつけよ！

汗をダラダラかいていた。冷たい汗だった。梅雨明けの晴天で、グランドは煮えるように暑かった。GK（ゴールキーパー）の長袖のユニ（注2）の中で、俺はカッカとして冷たい汗を流していた。目がくらみそうだ。マズイぜ。俺は本間さんを探した。ウチのチームの奴らは切羽詰（せっぱつ）まるとみんな本間さんを探すんだ。元キャプテンの正GKはベンチのまんなかへんにどっかり腰を下ろして、深山学院（注3）のスタメンが軽くボールまわしをするのをじっと見ていた。鋭く冷たい視線だった。俺のことなどまるで意識にないようだった。

進藤が俺に何か言っていた。（注4）ディフェンスの連携の確認だ。言葉は聞こえているけど、意味が頭に入ってこない。それでも、俺は無責任にうんうんとうなずいていて、いつも本間さんがやるように気合を入れる掛け声を一発出そうとして、まるで声が出ないことに気づいた。

キック・オフの笛が鳴り、森川がセンターサークルからボールを蹴（け）る。夢を見ている

ようだった。グランドで起きていることがすべて夢で、俺の身体や意志とは無関係に進んでいくのだ。ボールを預けられた田代がドリブルで中に切れ込もうとするのを俺はぼんやり見ていた。自分がぼんやりしているのがわかった。ずっとあっちにいてくれと思った。俺のほうに来るなと思った。

動けねえ。身体が動かない……。石になったみたいだ。

「木島っ、(注5)セットだ！」進藤に怒鳴られて、俺はあわてて相手のコーナー・キックに身構えた。ゴールの中で石になっている場合じゃねえ。キッカーのボールはゆるいカーブを描いてファーポスト(注6)へ。誰かがクリアした。俺はぼんやりして石のように固まっていた。「木島っ、声出せっ。コーチングしろよ」進藤が言っている。セット・プレー(注7)の守備はGKが指示を出さなければならない。でも、俺は声なんか出ない。逃げ出したいと思った。情けないが、本当に動けないし、声も出ないのだ。ゴールに石を置いても意味がない。俺はここにいちゃいけねえ。チームに迷惑がかかる。スローイングから、ゴール前の競り合いになって、相手チームの選手に当たったボールがふわんと上がり、俺はぎくしゃくしながら、取りにいった。ゆるいボールだった。変な回転がかかっていた。ボールは俺の手の中でねじれて、はじけて、飛び出した。目の前に転がったところを相手FW(注8)の大原がゴール右隅にらくらくと蹴り込んだ。大原のガッツポーズ。深山の選手たちが大喜びで彼に次々と抱きついてくる光景は、テレビの中の出来事のようだった。信じられねえ。俺のミスだ。俺の失点だ。絶対にやってはならないと思っていた凡ミスだ。

進藤が俺の頭を乱暴にハタいた。「気にすんなよ。これで目がさめるさ」進藤はニヤリと笑った。「声だせよ。ボールはとりあえず俺に渡しとけ」「ああ」砂漠の中で遭難しかかっているかのようにカラカラの声が出た。逃げ出したかった。俺にはできない。ここは俺のいる場所じゃない。ゴール・キックを言われたように進藤にパスすると、ベンチの本間さんを思わず見た。本間さんは俺を見ていた。身が［A］。神様に裁かれているような気がした。何かが俺の中でバリバリと音をたてて壊れた。十六年間積み上げてきた俺の安っぽい自信や体裁や存在価値みたいなものがバリバリと砕けた。どうしようもなかった。明日から、いや試合が終わってから、どうやって生きていったらいいかわからないと思った。

頭に血がのぼった。それから、ハーフ・タイムまで、何をどうしていたのか、まるで記憶がない。とにかく三点でよく済んだものだと思う。ベンチで給水(a)しながら、終わった——と思った。恥をかいただけで終わった。後半は本間さんが出るだろう。容赦ない七月の日差しに照らされて、サブの選手がパス練習をしているグランドがやけに白く(②)見えた。本間さんはアップしている。何もかもが、まぶしい。白く、まぶしく、現実とは思えない。胸がひどくムカついた。後半、監督から、交替の指示はなかった。円陣が解けてベンチから出ていく時、本間さんは一言だけ俺に言った。「いったい何を恐がってんだ？」いったい何を恐がってんだ？　その言葉が何度も俺の頭の中を駆けめぐった。恐い？　恐いさ。何もかもが。特に、ヘマでヘボなこの俺自身が恐くてたまらねえんだよ。

あと四十分……。あと四十分、俺はあそこにいなけりゃいけないんだろうか？

田代が近づいてきた。何か迷うような顔をしながら、俺のユニの袖を引いて、目線でグランドの外を示した。田代の目線を追うと、見慣れたシルエットがあった。ウチの制服。女の子。村田だった。「いつから、いるの？」ひび割れたような声で俺は尋ねた。さあ、と田代は首をひねった。さっき気がついたんだよと言う。この無様な姿を見られていたかと思うと、また頭にカーと血がのぼった。なんだって、村田がこんなところにいるんだ？　サッカーの試合を見に来るような女の子じゃないじゃないか。グランドに穴を掘って隠れてしまいたくなった。あいつにだけは見られたくないと思った。この世から消滅しちまいたいと思っているくせに、俺の目は村田を見る習慣が完璧にできあがっていて、あいつがいればあいつを見ずにはいられない……。

村田は、いつもの顔をしていた。だいたい表情のバリエーションの乏しいヤツだった。物に動じない感じの仏頂面(b)に、どこか喧嘩(けんか)腰な厳しい顔に、喜怒哀楽がかすかに差し引きする。それが、すごく繊細(c)な印象を与える。相変わらずぶすっとしていて、何か強烈なオーラを放っていた。というか、俺がオーラを感じ取った。感電するように受け取った。村田はまっすぐだ。ごまかさない。取り繕わない。そのまんまの自分でまっすぐぶつかっていく。どんな結果でも敢然(③)と受け入れる。……たぶん。恥も失敗も能力のなさも。「いいな、木島クンは。やれることがいっぱいある」「私は何もできない。でも、何が好きかだけは、わかってるんだ」村田の声が耳によみがえった。細かい震えが全身を走るのを感じた。

（佐藤多佳子『黄色い目の魚』による。）

（注1）サブ・キーパー＝控えのゴール・キーパー。ゴール・キーパーは味方のゴールを守る人。
（注2）ユニ＝ユニフォームの略。
（注3）スタメン＝スターティングメンバーの略。
（注4）ディフェンス＝防御。
（注5）セット＝セット・プレーの略。
（注6）ファーポスト＝攻撃側からみてゴールの遠いほうの縦枠。
（注7）セット・プレー＝フリーキックやコーナーキックなど、ボールが制止したところからの攻撃スタイルのこと。
（注8）FW＝フォワード。主に攻撃をする選手。
（注9）敢然＝思いきって事をするさま。

1 ——線①「どんなにクールになろうとしても無理だった」とあるが、この時の「俺」の緊張している状態を最も端的に表した部分を、文中から**二十五字**以内でそのまま抜き出し、最初の**五字**を書け。

2 ——線②「やけに白く見えた」について俺の心情を述べた次の文の［　　］に当てはまる最も適当な言葉を、文中からそのまま抜き出して書け。ただし、［a］は**七字**の言葉、［b］は**二字**の言葉、［c］は**八字**の言葉とする。

［a］なくらい極度に緊張している俺が、［b］を失い、何もかもが、［c］状態で呆然(ぼうぜん)としている。

3 ——線③「細かい震えが全身を走るのを感じた」のはなぜか。その理由について述べた次の文を完成させよ。ただし、［a］は**十五字**、［b］は**十字**で文中からそのまま抜き出し、［c］は**十五字**以内で心情をふまえて書け。

［a］村田の［b］ので［c］。

4 ——線a「給水」・c「繊細」の熟語の構成と同じものを、次のア～キの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を書け。

ア　雷鳴　イ　青空　ウ　道路　エ　登山　オ　入試　カ　寒暖　キ　未来

5 文中の［A］に入る最も適当な言葉を、次のア～オの中から一つ選び、その記号を書け。

ア　こおった　イ　おれた　ウ　すくんだ　エ　もえた　オ　入った

6 ――線b「仏頂面」の意味として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を書け。

ア 険悪な顔つき　イ ほほえましい顔つき　ウ 明るい顔つき
エ 慈悲深い顔つき　オ 無愛想な顔つき

7 本文についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を書け。

ア 試合中に凡ミスを繰り返した「俺」が、「村田」にまで冷たい視線を浴びせられ苦悩する様子が感情豊かに描かれている。
イ 試合のプレッシャーや過酷なグランド条件によって次第に押しつぶされていく「俺」の様子が客観的に描かれている。
ウ 最後まであきらめないで懸命にプレーしている「俺」の様子が、短文を繰り返すことによって様々な視点から描かれている。
エ 経験不足のために極度に緊張している「俺」の孤独と耐えがたい苦悩が、試合の進行にともなって臨場感豊かに描かれている。
オ 初めて試合に出場した「俺」が監督や先輩たちに励まされ、懸命に乗り越えようとしている様子が生き生きと描かれている。

（五）次の文章を読んで、1～6の問いに答えなさい。

いづれのころのことにか、山僧（注1）あまたともなひて、児（注2）など具して、竹生島（注3）へ参りたりけり。巡礼果てて、今は帰りなんとしけるとき、児ども言ふやう、「この島の僧たちは、水練（注4）を業（注5）としておもしろきことにてはべるなる、いかがして見るべき。」と言ひければ、住僧の中へ使ひをやりて、「①小人（注6）たちの所望（注7）かく候ふ。いかが候ふべき。」と言ひやりたりければ、住僧の返事に、「②いとやすきことにて候ふを、さやうのことつかうまつる若者、ただ今、皆たがひ候ひて、一人（注8）も候はず。返す返す口惜しきことなり。」と言ひたりければ、力（注9）およばで、おのおの帰りけり。

舟に乗りて二、三町（注10）ばかり漕ぎ出でたりけるほどに、張衣（注11）の鮮やかなるに、長絹（注12）の五条の袈裟のひた新しきかけたる老僧、七十あまりもやあるらんと見ゆる一人、脛（注13）をかきあげて、海の面を③さし歩みて来たるあり。舟をとどめて、不思議のことかなと、目をすまして見ゐたる所に近く歩み寄りて言ふやう、「かたじけなく小人たちの御使ひをたまひて候ふ。折りふし若者ども皆かたがた候ひて、御所望むなしくして御帰りさふらひぬる、生涯（注14）の遺恨候ふよし、老僧の中より申せと候ふなり。」と言ひて帰りにけり。

⑤これに過ぎたる水練の見物やあるべき。目を⑥驚かしたりけり。

（『古今著聞集』による。）

（注1）山僧 ＝ 比叡山の僧。
（注2）あまた ＝ たくさん。
（注3）児 ＝ 学問や行儀見習いのために寺に預けられている子供。
（注4）具して ＝ 連れて。
（注5）竹生島 ＝ 琵琶湖の北方に浮かぶ島。
（注6）水練 ＝ 水泳。
（注7）住僧 ＝ 竹生島の中の寺院に住む僧。

（注8）小人 ＝ 幼少の人、少年。
（注9）一人も候はず ＝ 一人もおりません。
（注10）町 ＝ 長さの単位。一町は約百九メートル。
（注11）張衣 ＝ 板に張り、堅くて光沢が出るようにした布。
（注12）長絹の五条の袈裟 ＝ 光沢のある五すじの布を縫い合わせて作った僧の着物。
（注13）脛 ＝ ふくらはぎ。
（注14）生涯の遺恨 ＝ 残念この上もないこと。

1 ――線①「小人たちの所望」とはどのようなことか。文中から一文でそのまま抜き出し、最初の**五字**を書け。

2 ――線②「いとやすきこと」の意味として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を書け。

ア とても好きなこと　イ とても簡単なこと　ウ とても気安いこと
エ 少し簡単なこと　オ 少し気安いこと

3 ――線③「さし歩みて来たる」の主語を、文中からそのまま抜き出して書け。

4 ――線④「さふらひぬる」の読み方を現代仮名遣いに直し、**すべて平仮名**で書け。

5 ――線⑤「これに過ぎたる水練の見物やあるべき」の口語訳として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を書け。

ア これは時間が過ぎた水泳の見物があるはずだ。
イ これは度が過ぎた水泳の見物ではあるまいか。
ウ これよりすばらしい水泳の見物があるはずだ。
エ これよりすばらしい水泳の見物があってほしい。
オ これよりすばらしい水泳の見物はあるだろうか。

6 ――線⑥「驚かしたりけり」とあるのはなぜか。その理由を**二十字**以内で書け。